写真展示
映像上映

島クトゥバで語る戦世（いくさゆ）

大正区コミュニティセンター3階大ホール 2014年 6月21日(土)

写真展示 12時～20時（入場無料）

映像上映 14時～「島クトゥバで語る戦世」ほか
15時45分～ 比嘉豊光氏の語り（入場料1000円）

主催・関西沖縄文庫 ☎ 06-6552-6709

「うぁー！うぬ死人ぬはらから蛆、
蛆ん湧ちゃ、なー直ぐ英処いっぱ
いやるばーよ。…あぬ臭煙りよ、
昼見たらよ、うぬ壕ぬこっち側よ
真白くあんしもがゆたんり…　」

うぁー！その死人の所から蛆、蛆が湧いてね、
もう直ぐそこいっぱいなんだよもう！…あの臭煙
昼見たらよ その壕のこっち側よ、
真白く立ちこめていたって、…

「島クトゥバで語る」

‘島クトゥバ’とは、沖縄本島及びその周辺地域で標準日本語が入ってくる前から話されてきた言葉の総称である。それらは日本古語から派生しているが、母音体系を含めた音韻変化が起こっているため、その差異は著しい。つまり、日本語標準語をわかる人が‘島クトゥバ’を聞いても、大体の場合、意味を理解することができない。けれど沖縄戦の体験者にとっては、その言葉こそ家族や社会から最初に譲り受ける言葉＝母語なのである。

「‘島クトゥバ’で語られる戦争体験と標準語で語られるものとは何か違いがありますか？」―そう質問する方が居た。そのような質問をすること自体、その人が、沖縄戦の実態から遠く離れたところに居ることを証明していると私は思う。‘島クトゥバ’で語ることがその人にとっての語りだったのなら、それを標準語を使った語りと比較などすべきではない。ある人に語りをお願いしたのなら、その人の使う言葉を受け取るしかないだろう。おそらく、現在の日本や沖縄は「島クトゥバで語る」が多くの者にとって理解不能な言葉でなされてるからという理由でそれが表にでてきにくい社会なのだ。戦前・戦中の沖縄を想起する手がかりが消されている現状がある。

私自身は1982年、沖縄が本土復帰して10年後に生まれている。‘島クトゥバ’は19歳まで聞くことも話すこともできなかった。そんな私に親も祖父母も‘島クトゥバ’で語りかけることはなかった。しかし、私がそれを勉強し‘島クトゥバ’を使いだすと祖父母世代の方々が私に戦前・戦後の話を語って下さるようになった。農業をして自給自足の生活をしていた戦前の生活。出稼ぎで大阪に出て、日本語がわからずに困ったこと。そして、第二次世界大戦が起こり、沖縄の海岸線を米軍の軍艦が黒く染めたこと。艦砲射撃の下を走ったこと。ガマ（自然壕）に隠れたこと。

祖父母世代が戦前の記憶を語るとき、それは自然と‘島クトゥバ’で語られる。それはその当時、沖縄で生きる人間たちの言葉が‘島クトゥバ’であったからにほかならない。けれどその言葉も世代継承ができておらず、沖縄戦の記憶もまた、今後継承していくことが危惧されている。

来年は戦後70年の節目の年だという。沖縄戦のもたらしたものは今も沖縄に存在し続けている。戦争体験者の生きてきた時間。沖縄で流れてきた時間＝沖縄の戦前の生活・文化、それを一瞬にして破壊し、土地を焼け野が原にしたものが沖縄戦という時間＝であった。さて、私たちは戦争体験者の生きた70年という時間を本当に想起できているだろうか。

比嘉陽花　演劇集団比嘉座座長

同時開催
「軍隊は女性を守らない」
沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力
6/21(土)10じ～20じ
6/22(日)10じ～16じ
大正区コミュニティセンター

大阪市大正区
千島2丁目6番15号

＜会場までのアクセス＞

地下鉄長堀鶴見緑地線「大正駅」または JR大阪環状線「大正駅」より市バスに乗る。市バス「大正橋」の乗り場 2 4 5 番から「鶴町四丁目」「西船町」「地下鉄住之江公園」行に乗車、「大正区役所前」バス停で下車。